

Title	<批評・紹介> 玉井是博著「支那 會經濟史研究」
Author(s)	善峰, 憲雄
Citation	東洋史研究 (1942), 7(5): 352-354
Issue Date	1942-10-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/138843
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

批評・紹介

支那社會經濟史研究 玉井是博著

昭和十七年四月二十五日 岩波書店發行
A5 判本文六一八頁 定價五圓二十錢

本書は故京城帝國大學教授玉井是博氏の長逝一周年に當り、氏の業績を記念して今春發行された遺稿集である。既にみなれた論文が多いのであるが、今かうして一冊となつて机の上に置かれると、又新しいものを感ずる。

本書收めるところ十四篇、氏が生前史學雜誌をはじめ、史學關係の學術雜誌・論文集に掲載されたものであつて、その内容は最後の一を除き、いづれも氏が研究の對象とされた唐宋時代の社會經濟史に關する論文である。本書は先づ唐代社會經濟史の概説を以てはじまり、次いで細論に入り、更に深く唐宋時代社會經濟史研究の資料への基本的研究を一括提示する様に配列されてゐる。

「唐時代の土地問題管見」(史學雜誌三三ノ八・九・十・大正十一、八・九・十)「唐時代の社會史的考察」(史學雜誌三四ノ四・五、大正十二、四・五)は自らその概説の部に當る。これは氏の東京帝國大學の卒業論文に際しての研究であつて、本書の概説たるのみならず、氏の研究のそれであり、初發表であつたわけである。しかし何分二十年餘前に發表されたものであるから、細部に於ては其の後の學界の進歩によつて、修正されなけ

ればならない點も二三ならずある様であるが、しかし概括的論述として、又幾多の唐代社會經濟史の諸問題を提起してゐる點に於ても、今日更めて讀みなほさる可き價値を失はぬものであらう。

ついで、それらの中からの特殊問題の研究が、畢生續けられたのであつて、「唐の賤民制度とその由來」(朝鮮支那文化の研究 昭四、九)「唐時代の外國奴——特に新羅奴に就いて——」(小田先生頌壽記念朝鮮論集 昭九・十二)「唐代防丁考」(池内博士還曆記念東洋史論叢 昭十五・三)の三篇を收む。數はわづか三篇ではあるが、後の宋代水利田の研究と共に、眞摯にして且つ緻密、しかも叙述は廣汎にして、論理は明晰なる氏の學風を最もよく發揮せる、本書中の中心部である。なほ「唐代防丁考」は氏逝去の年の春に發表になつた最近作である。

氏の學問探求の情熱は、更に唐代社會經濟史研究の根本史料を求めて、ヨーロッパにまで氏を驅つたのであつた。パリのブリオテーク・ナショナル、ロンドンのブリティッシュ・ミュージアムに分藏されてゐる燉煌發見文書中、社會經濟史研究に必要な文書を手録されて來たのであつて、その研究、紹介が次に錄せられてゐる。即ち、「燉煌戶籍殘簡について」(東洋學報 昭二、七)もつとも本篇は氏の渡歐前のものである。「再び燉煌戶籍殘簡について」(東洋學報 昭十二、八)「支那西陲出土の契」(京城帝國大學創立十周年記念論文集 昭十一、十)及び「燉煌文書中の經濟史資料」(青丘學叢 昭十二、二)である。單に紹介のみでなく、或は分類的に、或は歴史的に精細なる考察を加へてある。零細なる斷簡であつても、意外な研究の

成果を將來する貴重な資料であるから、出来るだけ紹介公表すべきであると言はれてゐるが、實に天地間の孤史料ともいふべき當時の根本史料たるこれらの古文書の發見とその學界への紹介は、唐代社會經濟史研究をして數段の飛躍を齎したことであつた。もつとも、これら文書は、那波博士の非常なる努力によつて、續々と研究、紹介されて居るのであつて、從つて王井氏のこれらの研究も、或は那波先生により二三ならす解釋し直されて居り、且つ燉煌文書研究は更に進んでゐるけれども、しかし氏のこの研究は、依然として基本的なるものとして、必ず見のがし得ないものである。

世に多い、やゝもすると概念的・形式的になりやすい社會經濟史家とはちがつて、たえずまじめに且つ深く眞實一路を追求してやまなかつた氏は、その研究の基本となるべき資料の正確さに向つて深く掘り下げられたのであつた。唐代實錄の研究、唐代社會經濟史研究に不可缺なる通典、大唐六典の研究、しかもその宋刊本を求めて北京に遊び、遂に詳細なる校勘記を製作されたことであつた。「唐の實錄撰修に關する一考察」(京城帝大史學會報八 昭十・十一)「大唐六典及び通典の宋刊本に就いて」(支那學七ノ二・三 昭九、二・七)「南宋本大唐六典校勘記」(東方文化史叢考 昭十・三)がそれである。その校勘記は蓋し貴重なる永遠の生命をもつものであらう。

次に稍々時代が下つて、宋代水利田の一種として東南地方に出現して重大な社會問題を惹起した園田・坪田・湖田等に關する詳密なる研究、「宋代水利田の一特異相」(京城帝大史學會報八 昭十・十一)がある。これに就いては他にも論文があり、

且つ又岡崎文夫・池田靜夫兩氏の江南文化開發史中にはより歴史的にあつかはれ、又その批判の如き所もあるけれども、しかしこの問題に關しては、最も詳密なる基本的研究たるを失はないであらう。

最後にたゞ一つ趣のかはつた清朝典禮問題に關するものがあるが、パリのビブリオテーク・ナショナルにて氏の手録になる所の珍らしい資料の紹介研究である。「典禮問題に關する漢文の二資料」(市村博士古稀記念東洋史論叢 昭八・八)がそれである。

以上の諸論文は既に發表すみのものばかりであつて、從つて大方の目にふれたものが多いのであり、且つその内容の紹介、もしくは批評の如きは、既に幾度か發表されてゐるのであるから、今はそこまでは立ち入らないでおかう。たゞ本書に收むるこれらの論文は既に古い發表のものもあることであり、且つ又日進月歩のわが國東洋史學界の昨日今日であるから、或は部分的には批判や反對説も提出されてをり、或は又明かに修正されなければならないとおもはれる點もみうけられる様ではあるけれども、しかしそれは敢て著者にとつて惜しむ所ではないであらう。それは一にわが東洋史學界のたえざる進歩を物語るものであつて、常に東洋史學の眞實を求めてやまなかつた著者にして、かゝる學界の躍進を、ほゞるみを以て眺めてゐて下さるにちがひないと信ずる。

唐代史を研究するものは、今日まで多少とも氏のこれらの論文のお陰を被らなかつたものは少かつたであらうと共に、將來も亦常に新しく、幾多の人々によつて讀まれることであらう。

その意味からしても、氏の多くの論文が、今一冊に纏めて公にされたことは學界にとつて喜びにたへない所である。そして氏の長逝一年餘にして早くもその遺稿集が世におくられたことは、全く氏の人格とその學問、及びそれへの厚き衆望の結晶でなくて何であらうか。深く敬意を捧げて、この亂雑な紹介を終る。

なほ題辭は市村博士の筆になり、著者肖像、著者年譜とが附してあつて、氏のありし日をしのばせてゐる。〔善峰憲雄〕